

# LIBRARY

鳥取大学附属図書館報

138

Nov. / 2022



## INDEX

- 01 巻頭言  
こぶとりじいさんをめざして 岡田 太
- 03 私の選んだこの一冊  
『世にも美しい数学入門』 河野勝宣  
『なつのやまのとり』 金 京純
- 07 鳥取大学附属図書館ビジョン2025について  
09 第27回 鳥取県図書館大会報告  
10 トピックス  
附属図書館の新型コロナウイルス感染症対応

# こぼとりじいさんをめざして



岡田 太(おかだ ふとし)  
副学長(附属図書館長、医学図書館長)  
医学部教授

2022年4月より附属図書館長ならびに医学図書館長を拝命いたしました。鳥取と米子にある大学図書館は、教育研究に係わる学術情報の中枢としての機能と、その情報を国民の共有財産として公開・提供する役割を担っています。附属図書館は鳥取県図書館協会に属しており、その会の中で鳥取県は全国でも秀でた取組みを実施する図書館を有することを知りました。病院司書や学校司書の配置に加え、法律情報・困りごと支援や子育て・長寿支援に至るまで県民生活と密接した斬新な活動を率先しています。全国に先駆けた取組を実施する県内図書館との連携を図りながら大学図書館としての使命を果たすことができるよう努めて参ります。

さて、私の専門は実験病理学で、その中でもがんの基礎研究を行っています。なぜがんはできるのか、どうして転移・浸潤などの悪性化を起こすのか、どういった理由で再発するのかなどについて原因を明らかにして治療や予防の糸口を掴む研究を行います。がんの発生そのものを防ぐことができれば最

善ですが、がんの実態に迫るほどかなり困難な理想と受け止めています。がん研究者たる者、がんの征圧や撲滅を掲げて立ち向かうべきでしようが、がんから学んだ事実を受け入れていることにはほかにありません。それは、がんを患うことは即ち長生きする多細胞生物体の宿命でもあるからです。正確に表現すれば、生殖期間を終えた後に長く生きる生物ほどがんを生じ易くなるのです。多くの動物は繁殖年齢を過ぎると死んでしまいます。後生殖期間(いわゆる老年期)は、人に近縁の類人猿などごく限られた動物でも寿命のせいぜい10%程度かそれ以下で、多くの野生動物に老年期はないようです。しかし、現代人は40%を超えるほど際だって長い期間、老年期を迎えるのです。これが齢を重ねるにつれてがんを患い、そしてがんで亡くなる理由です。

別の例で補足しますと、最近はいヌやネコを室内で生涯にわたり飼うようになりました。同種異種間の闘争や飢餓のない環境下で飼育すると寿命も延びるようです。1980年の平均寿命はいヌが2.6年、ネコが3.0年であったのに対し、2010年ではいヌが15.1年、ネコが12.6年にまで延伸したそうです。この30年間におおよそいヌは6倍、ネコは4倍長生きするようになりました。寿命を正確に計測された動物に限った統計の範囲内ではありますが、いまでは我が国のいヌ・ネコは世界一の寿命を誇るそうです。最期に際して死因も明らかにされるお陰でがんが死因となるのはいヌ54%、ネコ38%を占めるという統計もあるようです。人では28%程度ですのでやはり長生きするほど死因としてのがんが生物種を超えて浮き彫りになるようです。

それでは、長生きするほどがんが生じるのは避けがたく必然であれば、がんで死なないようにすれば良いということになります。がん死の90%以上が転移や再発のいわゆるがんの悪性化を起こすことに因るものです。たとえがんが発生しても、悪性化を起こさないおとなしいがんに留めておくことができれば、これは発生部位を厳密に選びますが、がんで命を落とす危険性はまずなくなります。私の研究グループでは、どうしたらがんは悪性化するのか、その原因を明らかにして、そういったがん細胞のみを傷害して体内から取り除く研究を行っています。がんが出来てもおとなしい性質のまま、この良性腫瘍を抱えたまま天寿を全うするのが私のがん研究の最終到達点です。

標題のこぶとりじいさんは正にその目標です。諸説あるようですがこぶの組織型は、唾液腺腫瘍(粘表皮がん、腺様嚢胞がん、多形腺腫など)、耳下腺腫瘍、ワルチン腫瘍、血管腫や脂肪腫なども挙げられているようです。これらの腫瘍も悪性化する場合がありますが、こぶとりじいさんのこぶは良性を維持したまま悪性化を起こさないことが重要です。時間経過と共に次第に大きくなりますが、転移・浸潤などの悪性形質を獲得せずに体内で一緒に共存するのです。

がんをこのような状態に留めて置くことが叶うのであれば、個人的に私はがんの制圧に成功したと言って良いと考えています。

これはおとぎ話では無く、実際に人で観察されています。それは“天寿がん”と呼ばれるがんを有する患者で、さしたる苦痛無しに、あたかも天寿を全うしたように人を死に導く超高齢者(その国の平均寿命年齢に10%上乘せした年齢と定義)のがんが相当します。発生する臓器や部位によっては天寿がんとならない場合もありますが、患者、家族そして医療者の認識が一致した条件下で、攻撃的な治療等を一切行わずに迎える穏やかながん死であり、苦痛無く安らかに生涯を全うし、本人も家族もその成り行きに満足している状態を指します。換言すれば、がん死を人の自然死として肯定的に見る視点とも言えます。こぶとりじいさんは天寿がんの最たる例であり、私の目指す大目標なのです。

蛇足ながら、標題の「こぶとりじいさん」は、「瘤取り」の意味で書かせていただきましたが、実は「小太り」でも通用するようです。痩せすぎや太りすぎに比べて小太りであることが男女ともに死亡リスクが最も減り寿命が延長するそうです。いずれの意味においても目指すは、やはり“こぶとりじいさん”なのです。



# 『世にも美しい数学入門』

／藤原正彦・小川洋子著』



河野 勝宣(こうの まさのり)  
工学部 准教授

今年度から附属図書館委員を務めることになった。その関係で、図書紹介の執筆依頼を頂いた。せっかくの機会なので、そんなに深くも考えず、引き受けることとした。ひとまず、「図書館報」のバックナンバーの「私の選んだこの一冊」の先生方の図書紹介記事を読んでみた。どの先生方も自身の体験や経験とリンクさせながら、図書の魅力を非常にわかりやすく紹介しており、私自身「読んでみたい！」と思わせる書きっぷりであった。普段、執筆活動といえば、論文や研究プロポーザルが大半である私にとって、このような執筆は慣れておらず、少々お堅い文章になってしまうかもしれないがご容赦願いたい。(←すでに堅いですね…苦笑)

普段の私は、ジャンルを問わず色々な本を読むが、特に、実話に基づいた長編ノンフィクション作品が好きで、故 吉村 昭さんの本をよく読む。その中でも①「高熱隧道」、②「罨嵐(くまあらし)」、③「破獄」が私のお気に入りである。ざっくり紹介すると、①は岩盤最高温度165度という過酷な高熱地帯におけるトンネル貫通に挑んだ男たちの執念の物語、②は日本獣害史上最大の惨劇といわれた三毛別罨(ヒグマ)事件における罨と伝説の猟師(マタギ)との対決物語、③は犯罪史上未曾有の4度の脱獄を実行した「昭和の脱獄王」と言われた無期刑囚とそれを防ごうとする刑務官たちとの闘いの物語。

“1冊”という趣旨にもかかわらず、すでに3冊挙げてしまっているが、どの本も状況が目の前に浮かぶ臨場感がクセになる。是非読んでいただきたい。私は決して読書家ではないが、人並みに読書をするきっかけとなった本がある。今回はそのきっかけとなった本、藤原正彦さん・小川洋子さんの『世にも美しい数学入門』を「私の選んだこの一冊」として紹介したい。

今でこそ本を読むようになったが、恥ずかしながら、大学4年の時に研究室に配属して卒業研究をするまで、読書嫌いで、まともに本を1冊読み切ったことがなかった。学部4年次は環境地質学研究室という工学部の土木系学科にありながら、理学色のある研究室に所属していた中で、岩石力学に関する研究を実施していた。そのため、お隣の岩盤工学研究室(工学系の研究室)所有の実験室での作業が大半を占めた。そんな縁もあって、時には岩盤工学研究室(当時)の後藤隆司先生からご指導いただく機会も多々あった。来る日も来る日も、実験室で岩石供試体を作り、破壊実験するという作業をこなしていたある日、後藤先生から「河野くん。この本面白いぞ。あげるから読んでみなさい。」と言われたのが本書との出会いである。「卒業研究でそれどころじゃないよ」と内心思いつつも、なぜか、そのタイトルに惹かれ、さっそくその晩!とまではいかなかったが(数週間後だったと記憶している)読んでみた。本書は数学者の藤原正彦さんと作家の小川洋子さんの対談形式で、非常に読みやすく、ふたりのテンポのよい掛け合いも魅力的である。小川さんが本書内で「私の数学レベルは、分かりやすく言えば、町内の少年野球の補欠レベルであろう。藤原先生はもちろん大リーガーである。これだけ大きなギャップを背負っているにもかかわらず、私は一瞬たりとも退屈しなかった。」と述べているように、読書があまり得意でなかった私があつという間に読み切ってしまうほど面白かった。



「数学は、ただ圧倒的に美しい」これは本書の裏表紙の一文であるが、本書を読むと、世の中の複雑多様なものを、美しい俳句のように、一つの数式で一気に統制してしまうほどの豪快さと美しさ、その反面、悪魔的な顔をもつ“数学”の魅力に惹き込まれるだろう。これまで当たり前のように使っていた定理「三角形の内角の和が180度である。」や、オイラーの等式「 $e^{\pi i} + 1 = 0$ 」がなぜ美しいのか、過去未来永劫、何物にも侵されない永遠の真理の持つ美しさについて、魅了されるだろう。数学の世界でも、未だに証明がされていない問題が多々あり、数学者はこういった問題に日々アタックする。中には、そもそも解けるのか解けないのかすら判定できない「悪魔的な問題」が存在するという。そのため、証明できずに一生を徒勞に終わる数学者もいる。数学の分野に限らず、どの世界でも同じことが言えるだろう。科学者や研究者は、わかっていることを明らかにするために研究をするわけだが、当然、答えが出ない場合もある(むしろ、そのほうが多い)。最近、物事の本質をゆっくりと着実に時間をかけて追及するよりも、世の中の役に立つような研究、すぐにでも実務に直結するようなタイムリーかつクイックな研究が注目されているようにも感じる(競争的社会の中ではもちろん大事なことではある)。研究というものは、すぐに成果が得られるものから、何年も何十年も、場合によっては一生をかけてやっと成果が得られるようなテーマもある。取り組んだテーマが実は無意味だったと気づくこともある(当然、そうならないように事前調査、計画を立てるわけだが)。世の中がほんの

少し“研究の多様性”にも寛容であれば、実は、そこから(すぐではないが)画期的な成果が生まれることもあるのではないかと私は思う。AIの活用や、DX推進をはじめ、時流の研究に取り残されないことも当然大事である。「世の中から求められていること」「自身のやりたいこと／できること」の間で考え悩みながら日々研究活動を続けていく。そんな中で、本書は私にとって、少し大きすぎだが、研究の取り組み姿勢の原点を思い出させてくれる1冊である。日々、先が見えない研究に、苦しみ悩み懸命に取り組んでいる学生に、是非、手に取って読んでもらいたい1冊である。僅かかもしれないが、何かのきっかけになればと思う。

最後に、当時、卒業研究で、ある意味闇雲に実験をしていた私に本書を与えてくれた後藤隆司先生に感謝する。当時は気付かなかった、物事の本質を理論的に考えることの大切さを示していただいたように今では思う。



『世にも美しい数学入門』  
藤原正彦・小川洋子著  
筑摩書房, 2005.4  
【2階】中央図書館 開架  
916:Yon

私の選んだこの一冊

# 『なつのやまのとり／piro piro piccolo著』



金 京純(きむ きよんすん)  
農学部共同獣医学科 准教授

この本は、私が毎年楽しみに買っているカレンダーを作っているイラストレーターによる「鳥見ブック」です。鳥見とは、誰しもが知っているバードウォッチングのこと。本書は夏、日本の山に繁殖のためにやってくる46種類の鳥を可愛く、それでいてしっかりとした観察をもとに書かれている本です。著者が偏愛するイワヒバリなど、高山で繁殖する一部の鳥たちを除き、この本に出てくる鳥たちの多くが、実は鳥取にも春渡ってきて、そのまま夏の間繁殖します。渡りの季節には農学部キャンパスの、特に古墳周りで数多くの鳥たちの声が聴こえてきます。コロナ渦で気軽に旅行に行きにくいご時世、猛暑が続く鳥取から高山の鳥たちや風景に

思いをさせ、昔旅行で訪れた高山へと心は旅立っていました。

私にとっての夏の高山といえば乗鞍岳。コロナ前に訪れた時は7月、標高2700m近くある乗鞍岳の畳平です。7月だというのに残雪があり震える寒さ、そんな中でも野鳥たちは元気に囀り子育てにまい進中。コマクサが咲き乱れる斜面では、ヒヨコみたいな可愛いひなを連れたライチョウのメスが、人間を恐れることなく「ちょっと邪魔よ、通してちょうだい」と林道を横切り、われわれ人間たちはそのあまりの完璧なシチュエーションにニヤニヤするだけでした。そして次の瞬間、辺り一面モヤがかかり、ライチョウはその中へと姿を消し、高山植物のお花畑だけが美しく咲き乱れていたのです。そのお花畑の中、足元からひょっこり飛び出てきたのはイワヒバリ。これも人を恐れる様子は無く、忙しそうに幼鳥たちへの餌集めに夢中。その親を追いかけ一番に餌を貰おうと、これまた人の足元を横切るあどけない幼鳥たち。お花畑を取り囲むように森林限界で頑張るハイマツの枝先には、透き通った声で囀るカヤクグリ。ハイマツの実が大好物なホシガラスは騒がしい声で鳴きながら飛び交い、上空にはアマツバメがすごいスピードでビュンビュン飛び回り、小さな虫を口いっぱい集めています。



Hiromi, K.



バスに乗って乗鞍高原まで下りたら、次はシラカバやカラマツの針葉樹林内の散策路を鳥見です。涼しい空気の中、足元の藪からちらりと顔を見せてくれたのは、白い眉斑と黒い過眼線のコントラストが凛々しいヤブサメ。低木の枝にはアオジが囀り、早くも繁殖がひと段落したシジュウカラ等のカラ類は、巣立ちしたばかりの幼鳥を引き連れながら大きな家族群を作って林内を賑やかに移動しています。そのカラ類の混群を一生懸命追いかけているのは、日本で一番小さい鳥のキクイタダキ。キツツキの仲間であるアカゲラは、リズムよく枯れ木を突っついて餌を探しています。針葉樹の新芽を頬張りながらもフィフィと笛のような声で鳴くウソ、木の高いところでは、クロツグミやアカハラなどのツグミ達が大きく良く通る声で囀っています。枝先からパッと飛び立ち、ハエなどを空中キャッチしてはまた枝に戻るコサメビタキ、木の樹皮が動いたと思ったら、キバシリでした。完璧なカモフラージュ！

沢沿いの散策路に足を向けると、尾羽をピンと立てた小さなミソサザイが、激しく泡立ち流れる溪流の音にも負けない大声量で囀っています。水の中を潜ったり歩いたりして餌を探すカワガラス、笹が茂る沢沿いの斜面ではコマドリがお隣さんと大合唱、大きなモミの木のてっぺんに陣取りテリトリー宣言しているのは、幸せの青い鳥オオルリです。夕方、薄暗くなってきた森から聴こえてくるのは、平家物語などにも登場する妖怪「鵺」の正体と言われているトラツグミ。木々がざわめく夜の森に響く

独特な囀りは、確かに不気味だけれど、心が静まる感じもあるのです。

乗鞍岳を再訪するのはもう少し先になりそうですが、著者の実経験に基づいたイラストと文章が、鳥たちの仕草や生きる環境、夏山の一日の移ろいへと想像を広げてくれたのでした。

1冊の本で高山の上から麓の高原まで、目を瞑ればそこに広がる大好きな景色を思い出させてくれる。私にとってそんな一冊をご紹介させていただきました。この記事を読まれたあなたにも思い出の風景をよみがえらせてくれる本はありますか。本の楽しみ方も人それぞれです、こんな本の楽しみ方はいかがですか？



『なつのはやまのどり』  
piro piro piccolo著  
山と溪谷社, 2022.6

中央図書館 準備中

# 鳥取大学附属図書館ビジョン2025について

鳥取大学附属図書館(以下、図書館)では、昨年度、鳥取大学附属図書館ビジョン2025(以下、ビジョン2025)を策定しました。このビジョン2025は、ほぼ同時期に策定された「鳥取大学ビジョン2030」、「国立大学図書館協会ビジョン2025」、「鳥取大学第4期中期目標・計画」を参考にしながら策定したもので、今後5年間の附属図書館の描く理想とそれに向かう意欲を掲げたものです。

ビジョン2025は、図書館の基本理念とそれに基づく4つの目標、さらにその目標を実現するための具体的方策とで構成されています。

## 理念:

鳥取大学附属図書館は鳥取大学の基本理念「知と実践の融合」を実現するために、教育・研究の支援を行う学術情報基盤拠点として、さらには地域社会に貢献する図書館としての役割を担い、学術情報資源の整備と人材育成に努める。



## 目標1. 教育支援: 教員・学生との協働のもと、学生の多様な学修環境を整備する。

- 施設・設備: 館内施設を利用した学修と、学外からアクセスできるコンテンツ利用による非来館型の学修の双方の支援のための環境を整備する。

- 人的支援: 教員との連携による情報検索やライティングの講習会の開催、オンライン教材の作成を行い、学生の学修効果を高める支援を行う。
- 学生協働による図書館の活性化: 学生の参画による選書・展示・企画イベントを開催し、学生の視点を図書館運営に生かすことで、図書館の活性化をはかる。



## 目標2. 研究支援: 研究を推進するための電子的リソースを中心とする学術情報を安定的に提供するとともに、学内で創成される教育研究成果発信・保存のポータル機能を担う。

- 研究情報の安定的提供: 研究に必要な図書・雑誌等の蔵書、および、電子ジャーナル・電子書籍等のリソースを安定的に整備し、その利用環境を整える。
- 教育研究成果をオープンアクセスに: 学内で創成される教育研究成果を「鳥取大学研究成果リポジトリ」に登録し発信・保存することで、大学ブランド力の向上を図り、論文等の学術情報のオープン化を促進する。
- オープンサイエンスの推進: 研究データの適切な保存管理およびオープン化を推進するため、研究データマネジメント環境を整備する。



### 目標3. 社会貢献:地域の知の拠点として、公共図書館・大学図書館その他の組織との積極的な連携協力を行い、地域のイノベーション推進に貢献する。

- 相互連携・共同企画:鳥取県内および全国の大学・公共図書館と連携し、相互貸出・相互研修等を行い、地域デジタルアーカイブへの協力など、地域のイノベーション推進に貢献する。
- 地域ネットワークによる情報提供:鳥取県内の機関と連携し、地域における産学連携を推進する情報の提供に努める。
- SDGsの推進:SDGs目標4「質の高い教育をみんなに」を達成するため、地域に開かれた図書館として資料と環境を提供する。



### 目標4. 学術情報資源の整備と人材育成:デジタル資料、紙資料双方の学術情報資源を収集・整理・保存・提供し、その利用促進に努めるとともに、それらを担う人材を育成する。

- 資料整備:デジタル、紙資料双方の図書館資料の収集・整備と、所蔵資料のデジタル化を促進し、検索ツールを整備する。
- 情報の共有と創出:図書館員が教員・学生等と協力して、多様な学術情報の共有と創出に貢献する。
- 図書館専門職員としての人材育成と大学図書館機能の拡大:図書館員がこれまで培ってきた図書館の専門知識に加え、学術情報に関する新たな知識やスキルを習得し活用することで、大学図書館機能を拡大させる。

図書館では、ビジョン2025を今後の活動指針として、目標達成に向けて取り組んでいく所存ですので、今後とも、教職員、学生の皆様のご協力をお願い致します。

橋本 敬三(はしもと けいぞう)  
図書館情報課長

#### 鳥取大学附属図書館ビジョン2025

<https://www.lib.tottori-u.ac.jp/vision/vision2025.html>



#### 国立大学図書館協会ビジョン2025

<https://www.janul.jp/ja/organization/vision2025>



#### 鳥取大学ビジョン2030

<https://www.tottori-u.ac.jp/6009.htm>



#### 鳥取大学第4期中期目標・計画

<https://www.tottori-u.ac.jp/2793.htm>



## 第27回 鳥取県図書館大会報告

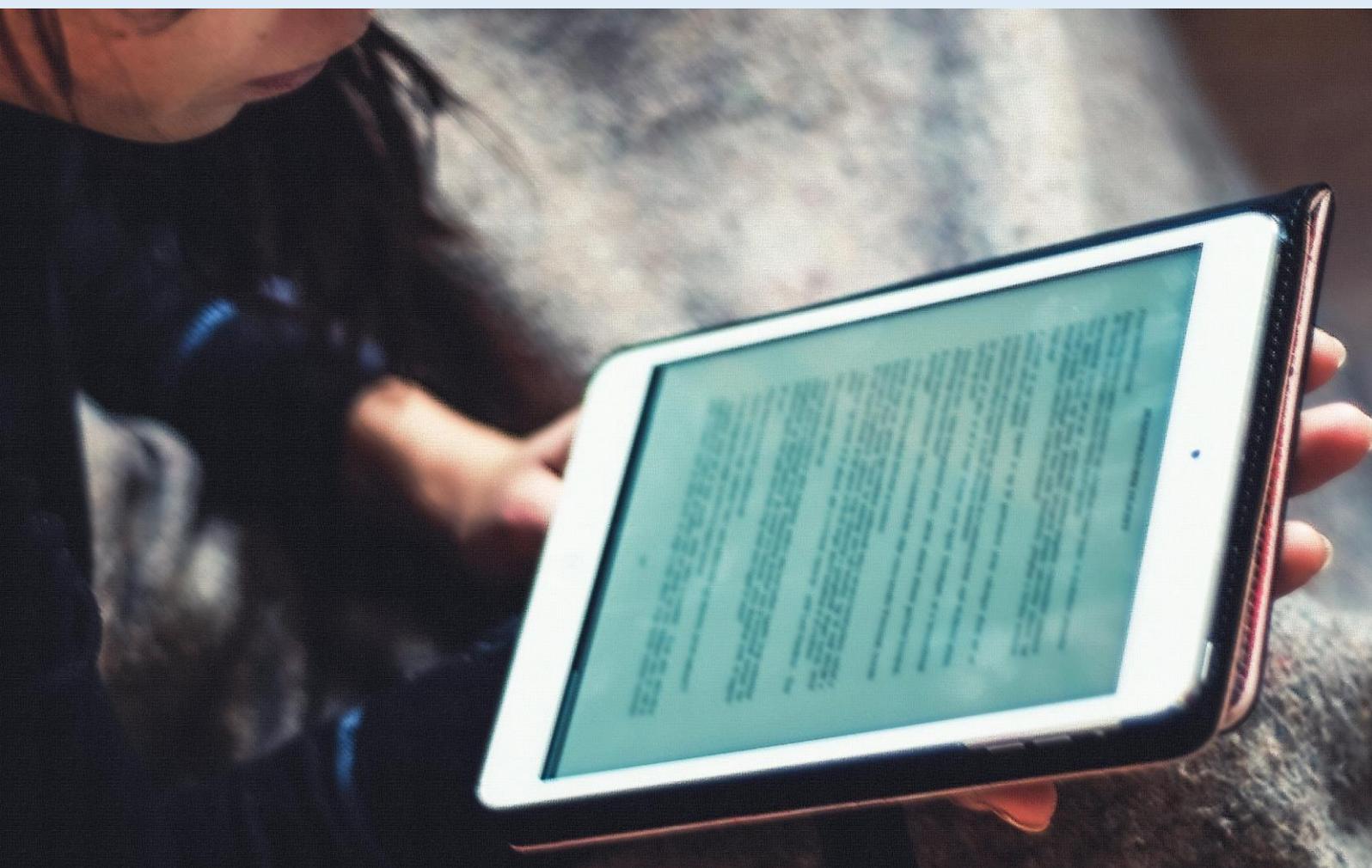
この大会は、鳥取県図書館協会が主催し、県内各図書館、書店関係者、さらにはボランティアなど読書に関わる方々の発表の場のひとつとなっている。今年度は、8月1日、昨年度と同様新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、Zoomによるオンライン開催となった。参加者は315名と盛況で、県外からの参加者もあり、このことは県立図書館をはじめ県内図書館関係者の日頃の活動の功績だと感じる。

今大会は、コロナ禍でデジタル化が進み、ICT教育の推進という流れを受け、「ICTを活用した図書館のあり方～デジタル化によるメリットを学ぶ～」をテーマとして図書館の役割、読書や教育の未来について学ぶ機会となった。

まず、「図書館DXを考える」と題して、青山学院大学教授・図書館長野末俊比古氏の記念講演が行われた。自身の大学図書館では、蔵書検索(OPAC)にAI

を導入するなどサービスの最適化を実現している。講演では、今までの学びを支える図書館からDXを活用して学び(合い)を創る図書館として、利用者のニーズを把握し一人一人の学びに合った支援が必要であることなど、DX時代に図書館が目指す方向性についての示唆を得ることができた。

続いての事例発表は最初に、電子書籍貸出システムを構築中の鳥取市立中央図書館長長本次郎氏より、導入の経緯や苦勞した点、今後の展望についての説明があった。“ハイブリッドな図書館”を市民への新しいサービスとして実現に尽力されている。次に、南部町立会見小学校学校司書安田美穂子氏が、学校DX化の実践例を報告された。児童読書推進と情報活用能力の育成という文科省が進めるGIGAスクール構想の課題への取組みとして、ポプラ社が提供する学校向け電子書籍「Yomokka!」のトライアルを導入



している。生徒たちは、それを利用し、タブレットで、家庭でも読みたい本を検索している。最後は、鳥取県ライトハウス点字図書館酒井詩織氏による“マルチメディアデジター”の具体的な操作方法等の紹介があった。これはバリアフリー図書を読む機械で、機能のひとつに、アプリを利用して既存の文書や画像をコピーして作成でき、読む(楽しむ)ことができる。携帯やタブレットでも利用でき時間や場所を選ばないので今後の発展性を感じた。

分科会は、「学校図書館×ICT活用」と題したパネルディスカッションに参加した。江府町立奥大山江府学園教諭黒見真由美氏、鳥取工業高等学校主幹教諭尾崎昭彦氏により、学校教諭の立場で図書館とICTを活用した学習支援活動の事例報告があった。その後、コーディネーターの鳥取県教育センター岩崎有朋氏により話題をより深く掘り下げ、学校側が図書館司書と連携し、ICTを駆使して生徒の能力を引き出すためには、相互の協力・理解が必要不可欠であることなど、興味深く拝聴した。さらに、図書館関係者を支えている鳥取県立図書館学校図書館支援センター橋中真紀子氏による活動報告では、学校図書館支援だけでなく、学校教育もバックアップするため県教育センターと連携している。職種、館種を超えてICT活用等の研修会、講習会を行っている。県立図書館の支援は、どんな場面でもどの情報源を使うのかを選択する“主体的な判断力”を身につけるスキルの向上に貢献していると改めて感じた。

今回の大会は、オンライン授業やリモート会議、GIGAスクール構想の急激な波を受けたタイムリーな話題であった。このような新たな環境の中で、模索していた課題を解決するヒントを大会参加者に共有できたと思う。そして、利用者のニーズを知るという原点に戻り、県内図書館等との連携のもと、自館の利点を活かしながらお互いに発展していく事が理想であるが、そこにICTを利活用し、アナログな部分を補完する構図が想像できる大会だった。



足立 美和(あだち みわ)  
図書館情報課

## トピックス

### 附属図書館の新型コロナウイルス感染症対応

4月	中央図書館の授業オンライン措置を受けた資料返却期限日の変更(17日～)
5月	中央図書館学生選書会をオンラインで実施(おうちでお気楽プチ選書)(25日～)
6月	中央、医学図書館閲覧室におけるマスク着用ルールの変更(16日)



編集・発行

鳥取大学附属図書館

〒680-8554 鳥取市湖山町南4丁目101番地

 <https://www.lib.tottori-u.ac.jp/index.html>

 <https://www.facebook.com/TottoriUnivLib>

 [https://twitter.com/TottoriU\\_Lib](https://twitter.com/TottoriU_Lib)